

# やまと 民俗への招待

鹿谷 繁

近鉄奈良線の富雄駅から富雄川を上り下りするようになって40年ほどになる。この間、富雄川の様子は大きく変わった。川西の道にはガードレールもなく、道からそのまま緩い斜面で川面につながっていた。夏にはわずかながら虫の姿も目にした。日々変化する川の表情を眺めながら朝夕川沿いの道を歩いていた。

富雄川との出会いは、実はさうにさかのぼる。年に一度8月3日に産土の地、生駒市高山に一族が集まって墓参りする習わしだったからだ。幼い頃、大阪方面から電車が速度を落としてガラガラと富雄川の鉄橋を渡る

と、辺りを走するよう瀬の音が響いてきた。思い出しても懐かしい鮮烈な音だった。その音を肌で感じながら、川端の停留所からバスに乗り、高山まで長い間揺られて川沿いの道をさかのぼった。川には魚を捕るモンドリが仕掛けであったようと思う。

川と道の間にガードレールが設けられると、川と自分が遮断されたような気がした。コンクリートの護岸が施され、さらには巨大な用水路のようになってしまった。三松橋のたもとに、川底まで大き



巨大な用水路と化した富雄川  
=2018年4月、筆者提供

## 命あふれた富雄川

の巨大な用水路のようになってしまった。三松橋のたもとに、川底まで大き

1949、50（昭和24、

25）年ごろ、この富雄川の下川橋付近で1枚ほどのオオサンショウウオが見つかり、あやめ池遊園地の動物園に持つていかれただという。川にはいろいろな魚がたくさんいて、空には真っ黒になるほど

のトンボがいたという。

オニヤンマは、糸の両端

にシズ（重り）を付けて放

りあげて、捕らえたとい

う。虫は私が自にしたよ

りももつとたくさんいた

ようだ。今も小魚がいて

五位鷺が獲物を狙う川で

あるが、かつては今から

は想像できないほど清ら

かで、小さな命があふれる川だったようだ。

25（大正14）年から38（昭和13）年まで奈良市に住んだ作家志賀直哉は、次男直吉が春日大社の境内の小川で、ドンボ、ギ、ハヤ、小エビ、小蟹など、地元で畠泥鮎と呼んでいるサンショウウオなどを捕つてることや、家族そろって電車で富雄川まで出かけ、フナやハヤやスッポンを捕りえたことを34（昭和9）年の「日曜日」に書いている。

川は人々の暮らしにさまざまな意味を持っている。大和の川の民俗にも注意を払いたい。